

第16回国際昆虫学会議に出席して

三木 順一

この会議は8月3日から9日まで、京都国際会館で開かれた。組織委員長は京大名誉教授の石井象二郎氏。国際昆虫学会議は1910年ベルギーで開かれたのが第1回で、4年に1回開催され、今回はアジアでは初めてである。参加国75ヶ国、参加人員は外国約1100人、国内約1000人、18の分野で約100のシンポジウムが行われ、発表講演題数約1300件にもなった。

この会議では昆虫分類学・形態学・生理学・生化学・遺伝学、の基礎的分野から、農業昆虫学、衛生昆虫学、森林昆虫学、家畜昆虫学、農薬などの害虫防除、養蜂学、養蚕学など応用分野も発表、討論された。

シンボルマークは「赤トンボ」で、日の丸の赤と白、秋津州（あきつしま）、京都のムカシトンボを意味しているという。このトンボマークの可愛いバッジを入口で会員章として渡される。又480頁にわたるずしり重い英文のみの抄録も戴く。それに「日本の昆虫学」と題する130頁の英文の本、日本の昆虫学の歴史から学者、研究所、単行本、雑誌までなかなか詳しく書いてある。3回位で廃刊になった虫の地方雑誌までのせてある。展示場には蚕の発育の生きた展示、幼虫の人工飼料飼育、日本産蝶の標本とその分類パネル、丸善の昆虫関係の洋書、保育社のカラーブック等の展示販売、それに機械屋の立派な実験器具などが出ている。8月2日にはギフチョウの絵柄の記念切手が郵便局で発売になったが、皆さん入手されたでしょうか。京都の会場では記念切手はなく、初日カバーだけの発売であった。会議の出席者は研究者ばかりで、蝶キチや採集趣味家の出席はほとんどないようだった。発表、討論、アナウンスまで全部英語で、机にある同時通訳のイヤホンも日本語なしは、勞れた。

第1日石井博士の英語のあいさつ、日本の昆虫学の歴史、害虫との戦い、鳴く虫や蛍を愛する国民の話など印象に残っている。初日の特別講演は西ドイツ、マックス、プランツ研究所のフランツ・フーバー教授の「Insects as model systems in neuroscience」。

鳴く虫の神経、筋肉、の微電流と発音音を、脳波や心電図みたいにして見せて戴いた。

第2日から各分科会になったわけだが、私は仕事の関係で初日に日本の蜂関係の学者と夕食を共にしながら、少し話をして満足して帰った。

(S. 06 : JUNICHI MIKI 福岡郡福岡町)

昆虫館だより ④

千種川グリーンライン昆虫館

館長 内海 功一

この夏には庭のカツラの木にアカスジキンカメムシが多数やってきた。その後、かの、台風で近くの山のキハダの実のついた枝が折れて落ちたとき、そのキハダの未熟な実に前記の虫の大小の幼虫が多くついていた。あの臭い実も好物の1つようだった。エサキモンツノカメムシもついていた。何とか飼育中。

つぎに、9月末、大栗郡の三方小学校を訪れたとき、赤い実をつけたニシキギにキバラヘリカメムシの幼虫が、これまた、無数といたい程ついていた。1部を払い落して持ち帰り、代用のツリバナなどで飼育中。先年はツルウメモドキの実にこの虫を見たが、ニシキギ科の植物を好むのがよくわかる。ついでに、船越山ではツノアカツノカメムシも見つかっている。

(S. 08 : KOICHI UTSUMI 佐用郡南光町船越)

佐用町でモンクロベニカミキリを採集

黒田 収

少し古い記録ですが、兵庫県佐用郡佐用町でモンクロベニカミキリ(*Purpuricenus lituratus* GANGLBAUER)を採集した。兵庫県産としては比較的珍しい種と思うので報告する。

〈採集記録〉

佐用郡佐用町 1♀ 10 VI 1979 黒田 収

当日午前11時頃、まだ新しいクヌギの伐木切口(直径8cm、長さ1.2m)の上に止っていた。産卵のため静止していたのかもしれないので、念のため材は持ち帰っている。

尚この日、他にコブスジサビカミキリ、キクスイモドキカミキリ、チャボヒゲナガカミキリ等を採集した。

(S. 14 : OSAMU KURODA 姫路市)